中島文学における＜実存＞

ー朝鮮在住の経験という視点からー

鄭　舜瓏

キーワード：実存、朝鮮在住、植民地、持病、肉親の死

戦前の日本近代文学において中島のように＜実存＞というテーマを顕然に且つ耽溺に思考し、作品化する作家はあまりいないのではないかと考えられる。「狼疾記」「カメレオン日記」のような私小説性が強い作品はもとより、西遊記の悟浄を借りて、絶えず「世界とは」、「我とは」と問い続ける「悟浄出世」も明らかに＜実存＞を中心のテーマとする作品である。

それらの作品または他の作品に潜んだ中島文学の特質である＜実存＞に対し、絶えず問うことはその源が一体どこからくるのであろう。従来は中島が生まれの病弱の身体に関わりがあった説と多く肉親と死別する経験と関係するという説がある。しかし、中島は上論のほかに、もう一つ重要な経験があると考えられる。それは海外在住の経験である。中島は少年の時に日本の植民地である朝鮮と満州に在住したことがある。現地で、異文化の体験のほかに、人種差別、民族優越性、被植民者のアイデンティティの葛藤などさまざまな体験は彼の人間認識・人生の意味に対する考えに影響を与えないとは考えられない。本論は中島文学における＜実存＞という要素は中島の海外在住の経験とかかわりがあったのではないかと論証を立てようとする試みである。

てい　しゅんろう／台湾大學　日本語学科大学院２年